



第3回グラフィック「1\_WALL」展

2010年8月23日(月)～9月16日(木)

公開二次審査会

2010年9月2日(木) 6:00p.m.～8:30p.m.

## 稀に見る色彩感覚に脱帽。作品のポテンシャルが評価されてグランプリに！

自身のおじいさんをモデルにした作品で動く展示に果敢に挑戦。人を元気にさせる作品のパワーと作家としてのポテンシャルが審査員を振り向かせた



## 受賞作 「ヨガじいじ」

体が不自由になっていく“おじいちゃん”という存在の身体をはちゃめच्याに自由にしてしまうというコンセプトです。体が自由に動く幸せを表現しました。



## 審査員コメント

佐野研二郎

「今回の展示をおいとしても、この色彩感覚とビックリすることをしてくれるであろうこの榎原さんのセンスは無視できない。彼女の作っているものにはパワーがある」

平林奈緒美

「展示はちょっと稚拙に見えてしまって残念だったが、ポートフォリオのインパクトがすごくて本命だった。色づかいやタッチが日本人にはないアメリカ的でポップな感じがある。モダンで面白いと思う」

有山達也

「今回の展示はダメだったけど、可能性をすごく感じるし、見た人を元気にさせてくれる。単純にそういうことは大きい。それが抜きんでていた」「ひとりで違う道を歩いているような、ちょっと異端児のような、そういう人間的な面白さも魅力」



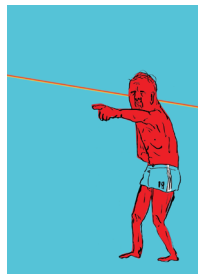
榎原美土里 Midori Sakakibara

'85年生まれ

北海道十勝出身

東京都在住

多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業

<http://sakakibaramidori.com/>

## FINALISTS ※五十音順

榎原美土里  
外山夏緒  
ナガバサヨ  
fancomi  
光用千春  
山田七重

## JUDGES ※五十音順、敬称略

有山達也(アートディレクター・グラフィックデザイナー)  
大塚いちお(イラストレーター・アートディレクター)  
佐野研二郎(アートディレクター)  
成田久(アートディレクター・アーティスト)  
平林奈緒美(アートディレクター・グラフィックデザイナー)

■ 出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略



外山夏緒 Natsuo Toyama  
「こけし～事変～」



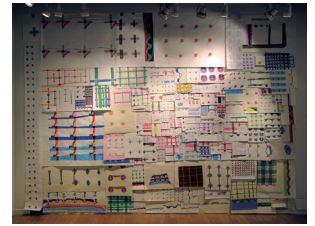
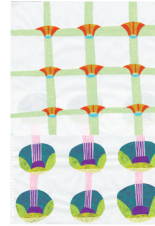
作品自体で完結するものより、その先のストーリーが伝わるものが好き。今回、こけしの歴史的な深みを崩さずに、どれだけおもしろい見せ方ができるか挑戦してみた。一体のモチーフに比喩的な言葉を通してはめて、姿形との組み合わせの面白さを追求した。

〈質疑応答〉

- 佐野:あなたは今後、「こけしアーティスト」としてやっていきたいの?
- 外山:何でもやっていきたいが、今興味のあるものが「こけし」だった。
- 成田:クスッと笑ってしまった。グッズや映像など広がりも考えられる?
- 外山:はい。いろいろと挑戦していきたい。
- 大塚:二次審査から最終審査までの間に何か工夫したことやアイデアは?
- 外山:作品一つ一つを空間の中でどう見せるかをすごく考えた。



ナガバサヨ Sayo Nagaba  
「芋蔓式」



物の形を構成している中で、特徴的な一部分を絵に表現した。今回のモチーフは、ソファやマットレスの表面の凹凸や縁の部分。枚数を重ねていくことで、現実のモチーフの形とは違った造形に変換されていく。私が捉えた物の一部を描き写す反復の中で、新しい風景が見えた。

〈質疑応答〉

- 佐野:一年前の出品時よりも今回の展示がパワフルになったと感じるが?
- ナガバ:前回はまとまりを意識したが、今回は力強く見せたいと思った。
- 大塚:二次審査から最終審査までの間に自分の中で変化はあったの?
- ナガバ:描く紙質や紙の大きさを実験的に変えてみた。
- 有山:壁に展示してある最終形を最初からイメージして描いた作品なの?
- ナガバ:描いていくうちに変わっていった方がいいから、どんどん増殖していくのを止めないように描いていった。



光用千春 Chiharu Mitsumochi  
「さみしきの鬼」



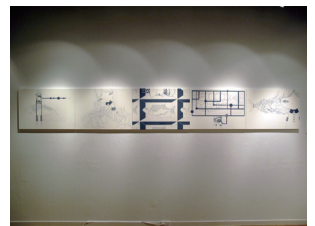
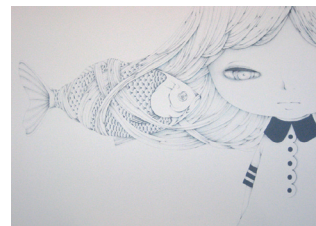
今回の展示に際して60枚ほどの新作を描いた。その時わかったのは「さみしい」という感情は側に人がいない関係なく生まれるということ。しかし、誰もが日常的にさみしいとは声に出さない。そんな人の気持ちに愛しさを感じる。私はさみしい時に絵を描く。

〈質疑応答〉

- 平林:壁一面に同じ調子で紙を貼っているが、それ以外の展示方法は検討したの?
- 光用:本にして見せることも考えたが、本が2冊しかなかったのでやめた。
- 大塚:用紙の端が黄ばんでたりするのはわざと?
- 光用:小学生の時に使っていたノートが余っているので、それを使っただけだった。
- 菅沼:作品のテキストとイラストレーションはどちらが先に出てくるの?
- 光用:だいたい言葉が先にある。



山田七重 Nanae Yamada  
「魚と私」



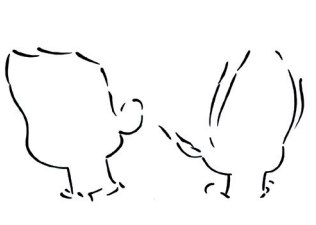
私は魚に興味がある。作品に登場する魚は、私の友人や私を取り巻く社会の象徴として描いたモチーフ。魚と私の関係を見つめると、自分自身の残酷的な部分、無慈悲な部分、偽善的な部分を感じる。女の子に自分を投影して、自分自身の不快な部分を表現した。

〈質疑応答〉

- 佐野:今日、原画を見て繊細で密度の濃さに驚いたが、1枚を描く時間は?
- 山田:一番右に展示した作品は1日で1ヵ月近くかかっている。
- 平林:全体の構成を決めてから描くのか、パーツから仕上げるのか?
- 山田:パーツから描き始める。
- 大塚:原画にドローイングの線や消しゴムの跡などが見えない?
- 山田:私は失敗が怖いから、細心の注意を払って作品を仕上げている。



fancomi fancomi  
「Fantastic Communication」



フライヤーの表紙に掲載されている、表情のない男の子と女の子のイラストから始まった作品。僕の中ではこの1枚だけでも作品は成立する。ここから何通りもの物語が生まれる。見る人が想像をかきたてられるような余白のある表現を意識して作品制作をしている。

〈質疑応答〉

- 平林:壁の床にあるオスジェを置いているA4コピー用紙は何のため?
- fancomi:このA4コピー用紙に絵を描くところから作品が発射しているため。
- 佐野:そのオスジェはどういう位置づけなの?
- fancomi:壁に貼ってある絵の中の登場人物をオスジェとして表現した。



榎原美土里 Midori Sakakibara  
「ヨガじじい」



見る人が難しく考えるのではなく、見て体感して楽しんでもらえる展示にした。「ヨガじじい」は、うちのおじいちゃんがルーツ。おじいちゃんは家族の間ではたくさん伝説がある。私は作品を通して、そんなおじいちゃんの生き方を多くの人に伝えたいと思う。

〈質疑応答〉

- 佐野:ポートフォリオと違って展示作品は解放され過ぎでは?
- 榎原:私も動き過ぎて意外だった。でも元気があって良いかも。
- 大塚:中央の大きなおじいちゃんが動かないのはなぜ?
- 榎原:動かしたかったがメカニカル的な方法がわからなかった。
- 有山:ポートフォリオに窮屈そうに入っていたおじいちゃんが良かったが?
- 榎原:はい、少し解放し過ぎた。



## ■審査員の感想

ファイナリスト6人のプレゼンテーションが終わった。進行の菅沼さんが各審査員に全体的な感想を聞く。平林さん：「第1回、2回に続いて3回目の審査だが、これまで一番難しい。展示作品の良さや将来性など選び方はいくつかあるが、『この人だ』という決定打はまだない」。有山さん：「この中で1人を選ぶのは難しい。どういう基準で選ぶかでグランプリの行方が変わってきそう。コミュニケーションビジネスをやっている人というのでも難しい」。成田さん：「まだ絞り込めなくて揺れている部分はあるけど、最終的には『この人と何かやりたいな』という気持ちで選びたい」。大塚さん：「放っておいても作品制作へのパワーが沸々と沸いているような人を選びたいと思っている」。佐野さん：「僕も3回目の審査だが、今回が一番難しい。というのは、ポートフォリオでは一番に挙げ期待していた人が、今回の展示で失敗しているために決め手がなくなった。本当に難しい」。



引き続き、出品者一人一人に対する感想を聞いた。外山さんの作品について。大塚さん：「誰もが抱く『こけし』のイメージを裏切ってくれた。単純に見て面白かった。しかし、展示ではもう少し強さがあれば良かった」。平林さん：「クールなところが好き。他の人とは違うアイディアがあって面白い」。佐野さん：「上手に見せようとしていないところが良い。立体物の展示も良かった」。有山さん：「今回はたまたま『こけし』だったが、彼女は何でも作品にできる人だと思う」。成田さん：「発想にオリジナリティがあって、ビジネスとして発展性がある。ウフフと笑っちゃう感じがいいと思う」。光用さんの作品について。大塚さん：「やっていることは面白いし、カワイイ作品だと思う。書いてあるテキストを読んで、格言的なところもあって勝手にスヌービーと比較した。絵の中のキャラクターが立っていないのが残念」。有山さん：「言葉にかかる比重が大きい作品。見る人によって好き嫌いが分かれそう。テーマにしている『さみしさ』を笑うくらいのシニカルさがあってもよかったのでは」。平林さん：「ポートフォリオでは面白かったが、今回の展示は全部を見るのが苦痛に思えた。展示方法を考えた方が良

かった。fancomiさんの作品について。大塚さん：「ポートフォリオの中にはいろんな面白い作品があったので、二次審査で僕が強く推薦した。どれもポップで可能性を感じた。しかし、今回の展示とプレゼンテーションには何か足りなかった。感動するモノが見られず残念」。佐野さん：「『1\_WALL』展のフライヤーを作っているが、その段階ではうまいと思った。しかし、展示を見ると、要素が多すぎて入り込めなかった」。成田さん：「直感で感じるまえに、いろいろ考えなくてはならない作品。コミュニケーションするには速いと思う」。ナガバさんの作品について。成田さん：「バツと見たとき好きな作品。触れてみたい。風に揺れてもキレイそう。いっぱいあるけど圧迫感がない。軽やかにハッピーになれる」。大塚さん：「見て単純に良いなと思える作品。言葉で説明できない何かがある。面白い作品」。佐野さん：「伝えてやる、という念が作品に出ている。全体を無理にまとめようとしていないところが良いし、部分的に見ても良い。この展示はずっと見ても飽きない興行きがある」。平林さん：「表現としてキレイで面白い作品。それから作品の横に付いている文章も好き。彼女にしか出せない答えを見せてもらった」。山田さんの作品について。大塚さん：「原画が良かった。この6人の中では唯一、平面の絵で勝負している人」。佐野さん：「彼女はただ細かく描いているだけではない。近づいて見ても粗がなく完成度が高い」。平林さん：「原画が素晴らしいところは良い点でもあるが、他への展開ができるか不安でもある」。有山さん：「スゴイ完成度。ビジネスとして考えても売れる絵だと思う。原画から伝わるものがある」。成田さん：「一緒に何かやりたい。構図の取り方や絵のバランスもすごく良い」。榊原さんの作品について。平林さん：「ポートフォリオのインパクトがさすが本命だった。ポップな色使いも好きだったが、今回の展示は少し稚拙な感じに転んでしまったのが残念」。佐野さん：「ポートフォリオでは断トツだっただけに、今回の展示は頑張り過ぎてちょっともったいない」。有山さん：「この太陽はちょっと稚拙。しかしこの独特な色彩感覚は魅力でもある」。成田さん：「ポートフォリオで好きだったから、この展示の失敗はショックだった」。



## ■審査員による投票

出品者一人一人の作品について各審査員の意見を聞いた後、いよいよ2名ずつ推薦者を発表してもらった。審査員が推したグランプリ候補は……

有山/山田 榊原  
大塚/ナガバ 山田  
佐野/山田 榊原  
成田/ナガバ 山田  
平林/ナガバ 榊原

票を集計すると、山田4票/ナガバ3票/榊原3票

僅差で3人が並んだ。さらに絞り込んでいくために「では、2票入れたうちの1番を推すとしたら誰でしょう」と菅沼さんが進行し、各審査員に1位票を発表してもらった。

有山→榊原/大塚→ナガバ/佐野→榊原/成田→ナガバ/平林→榊原

という結果になり、榊原さんに3票、ナガバさんに2票が入り、山田さんの票が消えた。ここで各審査員に応援演説してもらった。大塚さんが「山田さん、榊原さん、どちらの作品も好きだが、最終審査の場が一番展示の印象が良かったナガバさんを推したい」と言えば、成田さんも「3人とも好きだけど、ナガバさんのほうが展開に広がりがある点が決めた」と続く。有山さんは「榊原さんの我が道を行く異端児的なところが魅力だと思った」と榊原さんを推す。同じく榊原さんを推す佐野さんは「今回の展示はダメだが、それをおいとしても、この色彩感覚とビックリすることをしてくれるであろうと思わせるセンスは支持したい」。平林さんも「榊原さんのスピード感にやられた」。審査員全員の応援演説が終わると、グランプリはナガバさんと榊原さんの2人に絞られた。榊原さんを推す有山さん、佐野さん、平林さんは今回の展示だけでなくナガバさんが上だと認める。一方、ナガバさんを推す大塚さんと成田さんも榊原さんの展示は良くないと主張するが、作品の持つポテンシャルが一番だと認める。どちらを選ぶかの基準は、最終審査の展示を重視するか、作品のポテンシャルを重視するかという論点になった。議論の末、進行の菅沼さんが最終的な意思を確認するために挙手を求める。結果は5人全員が榊原さんでまとまった。この瞬間、第3回グラフィック「1\_WALL」のグランプリは榊原さんに決まった。ポートフォリオの内容などこれまでの審査の過程も総合的に評価し、今後の可能性の高さを期待されての受賞となった。



## ■出品者インタビュー

○外山夏緒さん：一次審査に始まって二次、最終審査と自分の作品を見てもらえて良かったです。プレゼンテーションはガチガチだったけど、終わった今はホッとしています。楽しめました。

○光用千春さん：審査は長く感じました。審査員の方の言葉もそうですが、他の出品者の方の視点や考え方が勉強になりました。また機会があれば、『1\_WALL』展に応募します。

○fancomiさん：コンペを意識し過ぎて真面目にやり過ぎました。公開審査では審査員の方の着眼点がわかりました。言われたことを頭に刻みながら自分のやり方でやっていきたいです。

○ナガバサヨさん：結果は悔しいですが、評価はしてもらいましたから。コンペは結果が出るものだから、運がなかったということ。グランプリを受賞した榊原さんの個展が楽しみです。会期中に来てくれる方には、私の作品を少し長い時間見てほしいですね。近づいて細かいところも見てもらえるとうれしい。

○山田七重さん：悔しいけど、仕方ないですね。『1\_WALL』展は面白いです。「こんなの、もうイヤだー」……というのはウソで、参加できて良かったです。ホントに。また出品します。

○榊原美土里さん：ホントに私でいいんですか？という感じですが、他の人の展示は素晴らしいだったので、そんな人たちの思いも背負って1年後の個展をがんばりたいと思います。今回の経験から、やりたいことがいっぱい出てきて、膨らんでいます。審査員の方に言われたことも良く考えたいです。ちょっと自分が楽しむことだけに集中してしまったことが反省点ですね。

<文中一部敬称略 取材・文/田尻英二>

■お問い合わせ先  
株式会社リクルート ガーディアン・ガーデン  
〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-5  
リクルートGINZA7ビルB1F  
TEL:03-5668-8818 FAX:03-5668-0512  
http://fcc.recruit.co.jp

Guardian  
Garden  
PRODUCED BY RECRUIT